

教師力向上支援事業派遣研修報告書

- 1 所属・職・氏名 高岡市立高岡西部中学校・教諭・佐々木 友紀
- 2 研修期間 平成30年9月17日(月)～平成30年9月24日(月) 8日間
- 3 調査研究課題 高い学習意欲と自分の意見をもつ授業実践の研究および公教育の調査研究
- 4 研修機関等 アメリカ合衆国ワシントン州シアトル、カリフォルニア州サンフランシスコ
- 5 研修の概要

今回、私は、この「平成30年度教師力向上支援事業派遣研修」に参加し、アメリカ合衆国における教育、文化、社会事情を視察する中で、多くの貴重な経験をさせていただいた。そして、教員としての視野を広げることができただけでなく、我が国の教育のよさを再認識することができた。また、かけがえのない出会いの機会をいただくこともできた。まずは、この貴重な機会をいただけたことに感謝し、ご配慮いただいた富山県教育委員会の皆様、富山経済同友会の皆様に心から感謝申し上げます。

生き生きとした子どもの学習意欲とそれを支える公教育～シアトル「ビーコンヒルインターナショナル小学校」での視察から～

視察先の一つであるシアトルのビーコンヒルインターナショナル小学校での英語の授業では、授業の中に考える場面を取り入れていた。英語を母国語としない小学1年生が **I help when I～**. という文型を使って物語を考えていた。単語の間違いをたくさんしながらも自分のことを英語で表現しようとしていた。また、**Mood Meter** という授業でパワーポイントの画面に注目させながら感情を4つに分けて、**mad, angry** など感情を表す言葉を教えていた。これだ、と思った。教え込む授業ではなく、体験的な授業が大切なのだと自分に新鮮なやる気を吹き込まれた。また、あるクラスでは、パワーポイントで **What is your favorite month of the year? My favorite month is---**. という学習課題のもと、授業が行われていた。月の言い方を教え込むだけでなく、なぜその月が好きなのか、理由も考えさせていた。日本で行われている英語教育も、英語を母国語としない子どもたちへの指導であることには変わりない。視察させていただいたのは小学校であるが、私にはワークシートの使い方、パワーポイントでの教材の作り方など英語教師として刺激になることばかりであった。

ビーコンヒルインターナショナル小学校では、地元の寄付があったり親の協力があつたりと日本とは違う支え方がなされている。また、学校長も把握できないくらい多くの言語を母国語とする児童が集まってきている。教職員は言語という最難関の壁があるにもかかわらず生き生きと働いていた。オープンスペースでは15人程度の児童の3展開の授業が行われていた。そして、何より恵まれているのはサブの教師が必ず配属されていることだ。登校後、朝食を学校で食べている児童がいるという現実もある。そのような貧しい家庭環境の中でも、英語を母国語としない子どもたちに対して、先生方が生き生きと接している姿を見ることができた。さて、私はどうだろうか。同じ教師として「働く」ことを考える機会となった。

生き生きとした教員の授業～サンフランシスコ「サンリアンドロ高校」での視察から～

サンフランシスコでの視察校サンリアンドロ高校は公立校であり、現地教員との座談会で話題に上がったが生徒の家庭を取り巻く経済状態があまり良くない地域とのことである。

このサンリアンドロ高校で一番印象的だったのは、職業体験である。テレビ局そっくりの設備を活用して、アナウンサー、ADなどの体験ができる。その指導をしているのが、テレビ局で勤務していた人だということも恵まれている。映像編集に興味のある生徒はコンピューターを使ってすばらしい作品を編集していた。私は一人の女子生徒に、「将来はテレビ局で編集の仕事をしたいか。」と質問した。彼女の返事は案の定、「もちろん」だった。デザイナーに興味がある生徒は、キーホルダーの企画から製造まで授業の一環として取り組んでいた。木工作品の製造に興味のある生徒は、指導教員のもと熱心に木工作品に取り組んでいた。化学の授業の一つとして、法医学の内容を勉強している授業も参観した。

この高校は私立ではなく公立である。日本のイメージだとこのカリキュラムは私立であるが、サンフランシスコの公教育も地域の寄付による潤沢な資金から成り立っていることを知った。そして、アメリカは州によって教育にあまりにも特色があるため、統一した学力試験を設けていることも知

った。つまり、日本の公教育では、北で学んでも南で学んでもほぼ同じ内容であるが、アメリカの公教育では、日本のような学習指導要領がないため、同じ州の中でも学習カリキュラムが全く違うということである。

サンリアンドロ高校で学べば、自分の将来の夢が形になり、インターンシップ制度を利用して、夢が現実になる。職業観を植え付けることができ、どの生徒も生き生きとして授業を受けていたし、授業をしている先生方も生き生きとしていた。

また、サンリアンドロ高校の副校長先生であるエレン先生と、中尾名誉団長の招宴でお話する機会をいただいた。印象に残っているのは「教師という仕事に誇りを持ってほしい」という言葉であった。英語を母国語としない子どもたちに対する指導のノウハウを教えていただくためにメールアドレスを交換することができた。そんな縁をもつことができたのもこの視察に参加させていただいたからこそである。

アメリカで輝く日本人の誇り～「シアトル日本総領事館」「シリコンバレージャパンユニバーシティ」「ジョンスタンフォード大学」での出会いから～

現在の私の根底にあるのは、出会った方々の「誇り」を感じることができたことである。シアトルでは、ボーイング社エバレット工場を見学した。誇りをもって働いている姿を見ることができ、自分の仕事に対する「誇り」を考える機会となった。シアトル日本総領事館表敬訪問では、2人の日本人女性の働く姿に出会い、同じ女性としての生き方を考える機会となった。特にソヴァはなさんは公立中学校の英語教員として働いた経験があり、部活動の指導に明け暮れていたという話を伺い、親近感をもった。なぜ渡米し、現在の職に就くことになったのかということもお話いただいた。

日本から渡米してシリコンバレージャパンユニバーシティを立ち上げた榎本博之氏の講話の中で、「世界にはばたく人材を送り出している先生という仕事に誇りをもってほしい」という言葉に感銘を受けた。なぜ、渡米するにいったかを知ると自分も勇気をもっているいろんなことができる可能性に満ちているのだと気付かされた。また、ジョンスタンフォード大学名誉教授のダニエル・オキモト氏宅で、日系2世としての人生についての講演を聞き、オキモト氏のお姉さんの生き方に涙が止まらなかった。女性だからといってあきらめることが当たり前だった時代があるということを知り、現在は何と恵まれているのだろうと思うと、もっとエネルギーに頑張っていこうと決心した。

また、今回の視察に同行してくださった小林知代さんは、通訳をしてくださった。アメリカで経営コンサルタントをされているが、私も通訳ができるくらいに英語を勉強しなければと刺激をもらった。

アメリカで出会った方々のさまざまな背景に触れ、「誇り」に触れ、私自身も魂を揺さぶられ「誇り」をもって教師として生きていける幸せも感じることもできたと思う。

この8日間、学校を離れ、アメリカでの様々な方々との出会いが、視野の狭くなっていた私の好奇心を刺激し、これから学校で誇りをもって教師として過ごしていく貴重な財産となった。視野を広げる、という言葉では言い尽くせない。アメリカにはアメリカの事情があり、日本には日本にしかできないことがありそこからにじみ出るよさがある。アメリカで研修させていただく機会がなければ気付かなかったことばかりだ。

中尾名誉団長をはじめ、富山経済同友会の方々とのお話は、日頃の生活では経験できない刺激的な話ばかりであった。そして、同行した団員とのつながりはまさに同級生のようなものである。8日間、寝食を共にする、ということがこんなに大きいものなのかと思知らされた。出会いに感謝、送り出してくれた同僚に感謝、中尾名誉団長をはじめ、富山経済同友会の皆様に感謝し尽くしてもし尽くしきれない。

今回の研修で得た経験は、日々の授業実践を通して、生徒に還元していこうと思う。今後は、研修で感じた思いや考えを大切に、広い視野から、日本の将来を担う子どもたちの教育に役立てることができるよう努めていきたい。